

## 祝言の音・声・音楽—能楽とその周辺

研究代表者：藤田隆則

プロジェクト研究

共同研究員：上野正章（本学客員研究員）、恵阪悟（帝塚山大学）、沖本幸子（東京大学）、鎌田紗弓（東京国立文化財研究所）、荒野愛子（神戸女子大学）、近藤静乃（東京藝術大学）、柴佳世乃（千葉大学）、曾村みずき（九州大学）、高橋葉子（本学客員研究員）、田草川みずき（千葉大学）、長田あかね（神戸女子大学）、丹羽幸江（本学客員研究員）、根本千聡（日本伝統音楽研究センター特別研究員）、坂東愛子（日本伝統音楽研究センター共同研究員）、吉岡倫裕（日本伝統音楽研究センター共同研究員）、武内恵美子（本学准教授）

開催趣旨：

祝言とは本来、時の節目を刻む特別な機会において、場所や人々を祝福するための言語行為を意味するが、特定の儀礼や儀式といった文脈の中で、その言語行為を声のにのせて唱えること、その機会に演奏される祝福を目的とした音楽などもひろく、祝言ととらえることができる。本研究の目的は、研究代表者が専門としている能楽を中心にした日本の音楽・芸能における、祝言を実行するための音の選択、組織化、その価値付けの方法や言説などについて、総合的に考察することである。

## 2024 年度の研究会

4 月 3 日竹浪遠「東アジアにおける松の意味と造形」  
4 月 10 日森田保美（笛方森田流）へのインタビュー  
4 月 17 日金剛龍謹（シテ方金剛流）へのインタビュー  
4 月 25 日吉阪一郎（小鼓方大倉流）へのインタビュー  
5 月 1 日高橋葉子「翁・高砂の特殊演出」 5 月 2 日祝賀能の段取りにかんする調整 5 月 3 日祝賀能（翁付高砂）運営 6 月 12 日高砂の楽譜作成の段取り 7 月 9 日高砂の楽譜修正作業（その 1） 7 月 13 日藤田隆則「能楽と早歌の拍節法について」 7 月 31 日

高砂の楽譜修正作業（その 2） 8 月 10 日『謡鏡』編集会議・作業（その 1） 8 月 11 日『謡鏡』編集会議・作業（その 2） 8 月 29 日高砂の楽譜修正作業（その 3） 9 月 11 日『謡鏡』編集会議・作業（その 3）・高砂の楽譜修正作業（その 4） 9 月 17 日高砂の楽譜修正作業（その 5） 10 月 16 日高砂の楽譜修正作業（その 6） 11 月 6 日高砂の楽譜修正作業（その 7） 11 月 29 日インターメディアと能楽（ゲスト：Jaroslav Kapuscinski 氏） 12 月 10 日『謡鏡』編集会議・作業（その 4） 12 月 11 日高砂の楽譜修正作業（その 8） 12 月 22 日高砂の楽譜修正作業（その 9） 12 月 24 日高砂の楽譜修正作業（その 10） 12 月 26 日『謡鏡』編集会議・作業（その 5） 1 月 9 日金剛流の謡の技法をめぐる 1 月 26 日『謡鏡』編集会議・作業（その 6） 1 月 29 日高砂の楽譜修正作業（その 11）・『謡鏡』編集会議・作業（その 7） 2 月 6 日『謡鏡』編集会議・作業（その 8） 2 月 12 日『謡鏡』編集会議・作業（その 9） 2 月 13 日『謡鏡』編集会議・作業（その 10） 3 月 25 日（高砂の楽譜修正作業（その 12、ゲスト：河村大氏） 3 月 26 日岩井家資料の閲覧・整理（その 1） 3 月 27 日岩井家資料の閲覧・整理（その 2）・次年度の計画相談

## 2024 年度の研究成果

- ・でんおん連続講座特別編後編「〈翁〉付〈高砂〉の舞台・演技・演出」2024 年 4 月 3 日-5 月 1 日（全 5 回）伝音セミナールームにて開催
- ・祝賀能（翁付高砂、風流、開口）2024 年 5 月 3 日、堀場信吉記念ホールにて開催
- ・上野正章・恵阪悟・田草川みずき・長田あかね・高橋葉子・藤田隆則（共編）『うたひ鏡—翻刻・現代語訳・解説』（日本伝統音楽研究センター研究報告 15） 2025 年 2 月 28 日刊行

## 「音・音楽と心身との連環」研究

研究代表者：武内恵美子      プロジェクト研究

共同研究員（所属等）

岡崎峻（無所属）

北川智利（立命館大学 BKC 社系研究機構招聘研究教員（教授））

権藤敦子（広島大学教育学部教授）

糸田昌宏（京都大学大学院生命科学研究科助教）

佐藤真理恵（神戸市外国語大学・国際基督教大学非常勤講師）

多賀健太郎（京都芸術大学・関西学院大学非常勤講師）

高木博志（京都大学人文学研究所教授）

高橋博巳（金城学院大学名誉教授）

唐権（華東師範大学外国語学院准教授）

仁科エミ（放送大学情報コース教授）

原翌（ニューヨーク市立大学大学院センター研究員）

松木裕美（愛媛大学法文学部人文社会学科講師）

松本佳久子（武庫川女子大学音楽学部教授）

光平有希（国際日本文化研究センター助教）

### 開催趣旨

日本をふくめ、洋の東西を問わず太古より人びとの生活のなかで音や音楽は根付き、またその身体的・精神的効能についても言及されてきた。しかし、音楽の治療効果に言及する現代の音楽療法分野においても「音楽にはなんらかの〈力〉がある」といわれ、根本的な全容解明には至っていない。「音・音楽」は人間に対してどのように、そして具体的になにが働きかけるのか。また、「音・音楽」とは人間をふくむ生物にとってどんな存在なのか。本研究会では日本の文化土壌に根付く音・音楽に着眼し、身体そして精神との連関性をめぐり、学際的・文理融合、そして古代から現代に至る各時代を横断的に検討していきたい。

今回、本研究課題に取り組むにあたっては、音楽学、音響学、音楽教育学、音楽療法学、音楽心理・脳科学のほか、司法臨床、実験心理学、細胞生物学、医学史、美学など様々な専門フィールドを専門とする研究者があつまり、分野を超え広い視野をもって議論を重ね

るなかで、音・音楽と心身との関係性について多面的に考察していく。

### （第1回）2024年9月28日・29日開催研究会

1日目 日時：9月28日（土）

場所：京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・セミナールーム

仁科エミ「ガムランへの情報脳科学的アプローチ」

岡崎峻「水中生物からみた音・聴覚」

光平有希「京都癡狂院にみる音治療」

松木裕美「京都の庭と水の音」

2日目 日時：9月29日（日）

場所：庭園実地研修（案内：松木裕美）

### （第2回）2025年1月18日・19日開催研究会

1日目 日時：1月18日（土）

場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・セミナールーム + Zoom

原翌「不確定性の音楽と心身の連環」

糸田昌宏「細胞は音を聞くかー細胞に対する音波の作用の探索ー」

松本佳久子「矯正施設における音楽ナラティブ・アプローチー「大切な音楽」の語り」

2日目 日時：1月19日（日） 場所：立命館大学 大阪いばらきキャンパス

錯覚・瞑想体験

北川智利「音の身体性と知覚」 + 総合討論

### （第3回）2025年3月17日研究会（Zoomによるオンライン開催）

日時：2025年3月17日（月）

一橋和義「ナマコを事例とした体感振動の基礎研究」

### （第4回）2025年3月24日研究会（Zoomによるオンライン開催）

日時：2025年3月24日（月）

和泉浩「サウンドスケープ概念の再検討」

## 日本音楽研究における基礎的資料の再検討と新たな活用に向けて

研究代表者：竹内有一

共同研究

共同研究員：青木由貴（邦楽演奏家）、井口はる菜（関西外国語大学准教授）、大西秀紀（本学客員研究員）、神津武男（早稲田大学演劇博物館招聘研究員、本学客員研究員）、小西志保（邦楽演奏家、竹内研究室研究嘱託員）、常岡亮（邦楽演奏家、常磐津協会理事）、配川美加（東京藝術大学非常勤講師）、福持昌之（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課）、細野桜子（邦楽演奏家、京都市伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィスコーディネーター）、前島美保（国立音楽大学准教授）、村井陽平（同志社女子大学准教授）、山崎泉（日本大学非常勤講師）

いくつかの分野における基礎的資料の学術的再検討を行い、日本音楽史の諸課題を考察した。主な課題は下記の通りだが、必要に応じ新たな課題も設定した。課題ごとにチームを組んで調査・研究等の作業を進め、適宜、成果公開を実施した。

### （1）常磐津家元旧蔵『常磐種』の基礎的研究

江戸期代々の常磐津家元が書き継いだ上演記録集『常磐種』（ときわぐさ、全5冊）を研究対象資料とし、その総合研究を2022年度から10年かけて実施するプロジェクトである。各年度末に成果を報告書として刊行する。『常磐種』および研究内容の委細・意義・特色・成果の委細については、年度ごとの下記報告書を参照いただきたい。

2024年度は、おもに第2冊「地之巻」の調査研究を進め、「地之巻」の影印と翻刻の編集、注釈の執筆等を行い、影印を収載する調査報告書を刊行した（『常磐種 3 地之巻（影印）』（常磐津節の伝承資料に関する調査報告書2024年度）、2025年3月、常磐津節保存会発行、文化庁補助事業）。

研究会開催日：（2024年）4月12・16・19・23・30日、5月7・17・24・31日、6月4・7・11・14・18・25・28日、7月2・12日、8月23・

30日、9月3・6・20・24・27日、10月1・4・11・15・25日、12月13・17・20・24日、（2025年）1月7・10日、2月4・18日、3月6・27日

\* 場所：日本伝統音楽研究センター

### （2）岸沢三蔵著『老の戯言』の発展的研究

2022年3月に刊行した『『老の戯言』（注釈）—『都の錦・老の戯言』その三一』（常磐津節保存会発行）に掲載できなかった「時代世話混雑の部」の注釈を作成するため、当該部分の調査研究を深めて注釈原稿を作成し、紀要に投稿する計画を立てた。十分に実施できなかったため、2025年度以降に持ち越す予定である。

### （3）日本伝統音楽に関する江戸期史料の書誌学的研究

前年度に引き続き、日本伝統音楽に関する文献資料（謡本・浄瑠璃本・うた本、理論書・歴史書など）について、それらの歴史的・学術的意義を再検討するため、書誌的な側面に着目しながら、原本や参考文献の調査収集等を行った。早稲田大学演劇博物館拠点研究の常磐津節板木研究チームとも連携し、常磐津節板木とその印刷物に関する調査研究も進めた。資料委員会および伝音図書室との連携では、図書室内プチ展示「富本節と薦屋重三郎」の展示制作を行った。なお、研究成果の一部は、JSPS 基盤研究（B）20H01205「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」（研究代表者：竹内有一）に基づいて長期計画で準備を進めている西村文庫公開の際にも活用する予定である。

\* 研究会開催日：（2024年）4月2・5・9・26日、5月7・21・28日、7月5日、8月27日、9月10日、10月8・22日、11月22・26日、12月10日、（2025年）1月14・21・24・28・30・31日、2月4・25・27・28日、3月4・5・6・7・8・11・13・14・15・18・22・25日

\* 場所：日本伝統音楽研究センター、オンライン

#### (4) 日本伝統音楽研究センターにおける未公開コレクションの基礎的研究

日本伝統音楽研究センターに所蔵される未公開コレクション（未整理資料）の状況確認とそれらの新たな活用方法について、2023年度に引き続き検討した。いくつかのコレクションおよび資料群については整理と目録化を進め、公開の準備を進めている。2025年度に公開予定のコレクション・資料群は、古典芸能公演パンフレットである。そのほかの未公開コレクション・資料群は、西村公一文庫、倉田喜弘資料、山田雅楽器資料、四世竹本綱吉資料、杉浦家 SP レコードコレクションなどがある。なお、伝音センター資料委員会および本共同研究では、未公開コレクションの整理、目録作成に協力いただける外部研究者を随時募集している。

＊研究会開催日：(2024年) 6月4日、7月5・9・16・19・23・26・30日、8月2・6・9・20日、9月13・17日、10月18・29日、11月5・8・12・15・17・19日、12月3・6日、(2025年) 2月1・6・7・8・13・15・20・21日、3月1・7・8・21・29日

＊場所：日本伝統音楽研究センター

#### (5) 崇仁お囃子会と柳原六斎念仏（伝承補佐と演目復活に向けて）

崇仁祭り囃子の調査研究については、2022年度に公開講座を主催し、一定の成果を得ているが、引き続き京都芸大が中期計画によって推進する地域連携の観点から、竹内研究室として崇仁お囃子会とその稽古をサポートする社会貢献活動と、崇仁祭り囃子のルーツである柳原六斎念仏の調査と演目復活に向けた研究を継続した。また、竹内の担当する音楽学部および音楽研究科の授業（音楽学特講、音楽学特殊研究）に参加した学生とともに、崇仁のお囃子とお祭りを紹介 web コンテンツ「崇仁の祭囃子 なんでも Q & A」の編集に着手した。このコンテンツは、崇仁まちづくり推進委員会 web サイトのコラム記事として2025年4月公開予定である。

＊研究会開催日：(2024年) 4月19、23日、5月4・9・11・14日、(2025年) 2月11・14・

22日、

＊場所：下京青少年活動センター、日本伝統音楽研究センター

### 様式分化をとげた雅楽を対象とする 伝承実態調査

■ 研究代表者：田鍬智志

共同研究

■ 研究期間：2021年度～2024年度（延長予定）

共同研究員：上野 正章（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員）、志川 真子（総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程）、Andrea GIOLAI（ライデン大学人文学部日本学科講師）、田鍬 智志、出口 実紀（大阪芸術大学芸術学部音楽学科特任教授）、前島 美保（国立音楽大学音楽学部准教授）、増田 真結（京都教育大学教育学部准教授）、松尾 象空（オブザーバー／青葉山松尾寺住職）

＊所属は2025年3月現在

■ 趣旨：全国各地で伝習されている雅楽のなかには、宮内庁楽部・南都楽所・四天王寺楽所雅亮会などの「標準的雅楽」の旋律・リズムとは著しく様式の異なる雅楽が伝承・伝習されている。舞鶴・松尾寺佛舞の付随雅楽は、知られている稀有な例であるが、そのような雅楽は往々にして、標準的雅楽との相違が認知されていないために、民俗芸能調査などで記録対象とされることが皆無に等しく、分布・伝習の実態が全く知られていない。そのような様式分化した雅楽は、音楽伝承における様式分化のメカニズムを考えるうえでも、また、「標準的雅楽」の過去の音楽様式をさぐるうえでも、貴重な伝承である。しかし、そのような様式分化の著しい雅楽は、後継者の人材不足による消滅の恐れもさることながら、往々にして、スタンダードな雅楽家の介入や、SNSなどの情報源の普及によって、その音楽が「標準化」してしまうことも危惧される。よって、本調査研究では、そのような様式分化の著しい雅楽の伝承の実態を調査し、その音楽を詳細に記録する。本調査研究でとりあげる雅楽は以下のような原則として、以下の要素を満たすものを指す。

1) 伝承曲に古典雅楽の曲名を冠するもの。（＊した



- がって吉備楽などは原則として調査対象外とする)
- 2) 編成に横笛だけでなく箏(くわえて笙)がふくまれるもの。(※したがって北陸・東北・東海地方などに伝承される舞楽系芸能(稚児舞など)の付随音楽などは原則として調査対象外とする)
- 3) 標準雅楽の旋律、奏法、リズムとは著しくことなるもの。

#### ■ 2024 年度調査成果の概要

前年度にひきつづき、おもに現地調査を実施した。とくに近江地方で活動の実態が知られていない民間雅楽団体を何件か取材することができた。また、8月にはこれまでの調査の中間報告として、「伝音セミナー」を実施した。

#### ■ 調査・データ整理・研究会開催の記録

- 04.06 守人の雅楽調査(若狭町 宇波西神社例祭準備):松尾。
- 04.08 宇根雅楽会調査(長浜市 春日神社例祭)・丸三ハシモト株式会社見学:前島・上野・GIOLAI・田鍬。
- 04.14 至誠雅楽会調査(日吉大社山王祭):上野。
- 04.19 調査録音聞きおこし作業:上野
- 04.19 調査予定箇所情報確認作業:出口
- 04.22-24 調査録音聞きおこし作業:上野
- 04.30 調査予定箇所情報確認作業:出口
- 06.06-07 調査予定箇所情報確認作業:出口
- 06.11 調査予定箇所情報確認作業:出口
- 05.12 楽講調査(有田市 得生寺中将姫会式):上野・出口・松尾・田鍬
- 07.15 下戸山永楽社調査(栗東市 五百井神社例祭):上野・田鍬
- 07.28 上半期オンライン総会(伝音セミナー企画会議・下半期調査地検討):出口・増田・志川・前島・田鍬
- 08.16 伝音セミナー「地方に根付いた雅楽のありようー伝承の分化と音楽スタイルの進化ー」開催、於 A 棟伝音セミナールーム:前島・出口・上野・松尾・田鍬。
- 08.16 滋賀県立図書館資料調査:上野
- 08.16 奏和会(大津市 和田神社千燈祭)調査:上野

- 09.01 伊豆神社八朔祭の雅楽(長浜市)調査:上野
- 09.22 下戸山永楽社調査(栗東市 五百井神社新穀の湯行事):上野・田鍬。
- 11.10 下戸山永楽社調査(栗東芸術文化会館さくら第 49 回栗東市文化祭芸能まつり):上野。
- 11.17 飛騨地方雅楽団体調査(本巢市民文化ホール 清流の国ぎふ文化祭 2024 文化芸能フェスティバルぎふ雅楽合同演奏会):上野。
- 11.17 花園郷土古典芸能保存会調査(かつらぎ町 遍照寺 花園の仏の舞):出口・松尾・田鍬。
- 11.23 東円堂雅楽会(愛荘町 豊満神社新嘗祭):上野・田鍬。
- 12.28-29 調査録音聞きおこし作業:上野。
- 01.08 オンライン部会(調査候補検討):上野・田鍬。
- 02.09 下半期オンライン総会(次年度調査地・報告書作成検討):上野・前島・増田・出口・GIOLAI・松尾・田鍬。
- 03.08 尾花沢雅楽保存会(尾花沢市 芭蕉、清風歴史資料館企画展「尾花沢のおひなさま」関連「尾花沢の雅楽演奏会」)調査:上野・田鍬。
- 03.23 第 67 回伝音公開講座「古代出土コトから和琴へトークセッションとライブ」:上野・前島・志川・田鍬、於 A 棟伝音セミナールーム、ゲスト:松井一晃・浅村朋伸・藤家溪子・中川佳代子。

## 酒場と音楽

### 研究代表者 齋藤桂

### 共同研究

共同研究員:秋山良都(ゲッティンゲン大学博士研究員)、上畑史(人間文化研究機構)、藺田郁(大阪大学中之島芸術センター特任研究員)、濱崎友絵(信州大学教授)、早坂牧子(東京音楽大学准教授)、樋口騰迪(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員)、矢野原佑史(京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員)

### ■趣旨

芸術音楽や、それに基づいて構築された音楽観では、作品のもつ情報を余すことなく聴き取ることが理

想とされる。そのような聴取のあり方の対極にあると言えるのが、騒がしい中で、酩酊状態になり鈍った聴覚によって音楽を楽しむ、酒場における音楽だろう。

しかし、世界の多くの地域で、酒場が音楽文化の揺籃地になってきたことは事実である。

酒場は時に、芸術音楽よりも露骨に聴衆の思想や欲望を反映させた音楽が奏でられる場でもあった。そのため、連帯感の創出や帰属意識の強調、懐旧の情の生成などにおいて、伝統音楽やそれにかかわる音楽的要素が絡むことも多い。

本共同研究では日本、ドイツ、セルビア、トルコ、イギリス、フランス、カメルーンなど様々な国・地域の様々な時代で、酒場が揺籃した音楽文化のありようを通じて、その役割や特徴を検討する。

■ 2024 年度研究会開催日

12 月 26 日（部会）、1 月 15 日（部会）、3 月 20 日（部会）